スラウェシとスムバワの沈香と生態資源

Agarwoods and Eco-resources Investigation in Sulawesi and Sumbawa.

山田 勇*、トゥリ・ムリヤニンシ**
Isamu YAMADA and Tri MULYANINGSIH

Summary

Ebony and Agarwoods were investigated in Sulawesi, Surabaya and Sumbawa from 21st August to 18th September 2006. Although the cutting of ebony was prohibited, small items were made from the used materials and sent to Japan. High quality Chinese furniture was made with special permission for exporting to Taiwan, China and Japan.

Agarwoods were sought by the Sumbawa people in Central Sulawesi. The original village in Sumbawa was a center of the collectors and more than 500 villagers went out to seek agarwoods. The port Probolinggo is a main port for the ships from Papua region. Most of the products are sent to Taiwan directly from here. The price of high quality of agarwoods becomes as high as one million yen. As the original resources have been getting scarce and scarce, the new trials of plantation are being carried out in many parts of Indonesia.

I. はじめに

2006 年にスラウェシ、スムバワの沈香や生態資源を調査した。ここでは、その調査の概要と最近の沈香をめぐる新しい動きについて報告したい。

筆者がはじめて沈香に接してから、はや 20 年以上の年月が流れた。はじめは、森林の生態学的調査の間に、調査中のプロットにあるアクイラリアの樹木をみつけて、沈香の存在を気にしはじめていたくらいであったが、その後、インドネシアとマレーシア各地に足をのばすにつれ、少しずつ、関心が交易関係にかたむき、それまであまりかえりみられていなかった現地の調査からはじまり、交易ルートの解明を試みはじめた。『東南アジア研究』［Yamada 1995］にのせた沈香の報告は、その当時の状況をまとめたものであった。しかし、その後、沈香の交易の場は大きくかわっていった。それまでカリマンタンを中心に採集されていたものが、伐採が進んで原生林が減少したため資源が枯渇し、場がパプアへ移っていったのである。

パプアの沈香はカリマンタンのものとくらべると、香りが悪いとされ、値も大きく異なる。

* 京都大学名誉教授、Professor Emeritus, Kyoto University
** マタラム大学農学部；Faculty of Agriculture, Mataram University

シンガポールに集中する業者も、はじめのうちは、パプア産は別扱いにしていたが、やがて、資源の中心がパプアにうつってきて、態度をかえはじめ、香りの質は問わなくなった。そして、ごく最近まで、パプアが取引の中心となっていたが、2005 年に、パプアを見た限りでは、すでにパプアでもピークはすぎさり、多くの業者が、また別の地を求めはじめていた。かつては千軒以上も軒をつらねていたというキオスク（沈香を取引きする小店）が、今では数十軒にへっている現状もみることができた。また、地上部を切りつくしたため、地下部の沈香を湿地へもぐって採取するという現場もみた。

資源の枯渇と反比例し、沈香の価格は上りはじめた。かつては 1kg あたり日本円で 5 万円くらいであった最上級品の「スーパー」は、2006 年には 100 万円近くになった。しかもそのスーパーはかつてのように大量にでることはなく、ごく少量が取引されるだけで、多くは、低価格の三流品である。それでも中間市場が活況を呈し、線香市場がのびているため、低価格の大量消費時代がはじまっている段階が今であると考えられる。

外からはワシントン条約のしめつけがあり、内からは、資源の減少という中で、転職を考える業者も少なくはないが、多くは、強気で残された資源を最大限につかって生きのびようとしている。

ここでは、ここ数年の沈香を主にした生態資源をめぐる動きについて、スラウェシからパプアにかけての交易を中心に報告したい。

本調査については、田中耕司代表者、アンディアムリさん、それに浜本聡子さんには大変お世話になった。記して感謝したい。

II. スラウェシの黒檀

スラウェシはインドネシアでももっとも不定形をした島のひとつである。となりのボルネオとくらべてみると、安定したボルネオと、複雑に入り組んだスラウェシが好対照である。ここには、ボルネオに生育するフタバガキ科の植物は少ないが、黒檀を産出することで有名であり、スラウェシといえば森林関係ではまず黒檀である。

スラウェシの黒檀はスラウェシ中部を中心に分布する。中部の都市パルから南へ入る山脈ぞいに多くみられ、西側のものはキメが細かく、東へいくにつれて質がややあらくなるといわれている。

今回、はじめて接した黒檀の巨木は、西海岸のマムジュの町から少し北へ上がったところを東の山脈へ入ったところにあった。ふもとの道から約 30 分、ゆるやかなココア畑の道を上り、少し急になった山の斜面の中腹にその大木はあった。

幹の根元部分は、やや坂根気味に凹凸をくり返し、胸高直径より少し上付近で直径約 1 m 弱、標高は 30m くらいか。黒く、硬く重々しい感じのする大木であった。これまで世界各地でみてきた多くの大木や古木とくらべてみると、外側からだけでも幹の重硬さがわかるくらい堂々たる木である。まわりには、稚樹や直径 30cm くらいの中木もみられ自然状態では

更新もふつうにおこなわれている様子である。かつては、これほどまでではないにせよ、かなりの数の黒檀がこのあたり一面に分布していたようである。所々に、かつて伐倒した木の名残がみられた。

黒檀の大木をみることは長年の念願であった。15 年ほど前にウジュンパンダンの郊外で黒檀を細工している日本人業者から話をきいて以来、なんとか現物をみてみたいと思いつづけていた。この業者は、中部スラウェシの黒檀資源も少なくなって、いい林がなくなってきた、といっていたが、まだ倉庫には、黒檀の床柱が何本もあった。しかし多くは、破材をあつめて、日本の仏壇用の小さな細工物をつくっていたのである。

マムジュから北へ上る道ぞいは、エビ養殖池がひろがりつつあった。そして、パルに近づくまでは、オイルパームの新植地がひろがっていた。道はわるく、まわりの家々も貧しくみえた。

パルの町でおもいがけなくも黒檀をあつかう一人の日本人に出会った。夕方、また時間があったので、何げなくのぞいた黒檀の会社が、自分のとこはもうやっていないが、カユヒタムセンターならまだやっているという。早速たずねてみると、ここは、スハルト時代にボブハッサンなどがいい出してできた黒檀専用の会社だが、今はやはりかつてのおもかげはない。黒檀が禁伐になっているのだから、材が入ってこない。これまでに家具や建築材としてつかわれた残りの破材を集めてやっているという。ここで井上さんという日本人の専門家の存在を知り、さっそく町の自宅へたずねる。

井上さんは、はからずも京都出身で河原町にあった傘店の息子さんで、私の友人の名前なんかもよくしっている。話がドンドンすすみ、いろいろな話を聞くことになった。

井上さんはもともと紙関係の会社に入り、そこで不燃布をあつかい、それを仏壇にしくことによって、おこりやすい仏壇の火事をへらすなど、創意工夫の人である。仏壇屋との関係がはじまり、それがこうじて、ここに 17 年間すむことになった。現在、黒檀は禁伐であるので、暑さ 6mm の小板を仕入れて、それを材料にして念珠、高杯、カネたたきの台や棒、仏壇の欄間、茶台、ペーパーナイフ、ハシなど、さまざまな小物をつくっておられる。

翌朝、工場をみせてもらう。ウラの倉庫にはトラックではこばれてきた破材がつまれ、8 人が働く工場では、小さな念珠の球からむつかしい欄間の彫刻まで、井上さんの指導のもとにインドネシアの若い人が技術を習得していた。材のけずり粉による影響で、去年肺の手術をされ、またこちらへもどってきたのは、ここの夜空がすばらしいからという井上さんは、まさにロマンチストであり、かつ材を丁寧にあつかってムダにせず、美しい作品をつくりだす名工でもある。

工場から 30 分ほど北へいった港町では、台湾からきた業者が、黒檀の家具をつくっている。ここは政府からの許可をもらって、毎年何トン分かの材を入れて、それで中国風の机、椅子、仏壇をつくっている。まぎれもなく、ムクの黒檀材ですべてつくられ、多くの職人が働いている。最後に中国ウルシをかけて完成する。黒びかりした見事な作品群が紙でくるまれ、台湾や中国に送られる。丁度、ダライラマが日本へきて、広島の寺で説教と会食をする

ための台座と膳のセットもつくっている。

井上さんのお話はおもしろい。私は、こういう出会いこそがフィールドワークの楽しみだと思う。おもいがけなく、すばらしい人やすぐれた物に出会う。それもほとんど予想もしなかったような型で。京都での再会を約束して出発する。

パルから峠をこえてポソへ出る手前にも一軒、黒檀で家具をつくる店があった。ここはウルシは使わず、素朴な黒檀の縞もようがそのままでる別のいい味があった。

黒檀は、カキの仲間である。日本のシマガキもよく茶道具等につかわれる。アフリカでは木彫に、東南アジアでは家具が多い。中国や台湾へいくと、ゴツゴツとした中国風の彫刻をほどこした古風なセットをみることができる。最近はよりシンプルなデザインが多く、黒く重い材質が、スッキリとした空間を形づくる。バリの木彫もかつては黒檀が多かった。今から 40 年前のバリは黒檀の見事な作品が店にはならんでいたが、今は少なくなった。黒檀材のうつりゆく歴史は、その背景にある熱帯林の変ぼうの歴史でもある。この 40 年の間にインドネシアを中心にした熱帯雨林はことごとく、姿をけしていった。同じことは、つぎにのべる沈香にもいえるのである。

III. 中部スラウェシの沈香

先にのべた黒檀は、今回の調査のおもわぬ収穫であった。長い間想いつづけていると、おもいもかけず、うれしい出会いがあるものである。今回の本来の目的はあくまでも沈香である。これまで、カリマンタン、スマトラ、マルク、パプアなどの沈香をみてきたが、スラウェシははじめてである。すでにスラウェシへは何度も足をはこんでいるのだが、その当時は、沈香よりも、サゴヤシに関心があったため、ほとんど沈香のことは気にとめなかった。今回はほとんどの時間を沈香調査にあてるべく、マカッサルの会議のあと、一路北へ向かった。

はじめに宿泊したのはママサである。マカッサルから北へ海ぞいに上り、つきあたりをそのまま山へ入る。ここからは例によって道はきわめて悪い。インドネシアは一部の幹線道路以外は昔からずっとこんな状況である。いや、昔よりももっと悪化しているところの方が多いといっていい。手入れをせず、ほおっておくからである。中国のように道班という道直しが常に補修をしているのとは全く逆で、20 年前に通った道が期待に反し、さらに悪化しているのをみるのはなげかわしいことである。

道は悪路をまがりくねって上っていく。谷の両側の尾根には結構森林が残っていて悪くない。ママサの町について、早速アチコチ情報をさぐってみると、二人ばかり、沈香をもっているという。みせてもらうと、白い下級品である。もっといいのは村にあるから、明日とってくるという。明日はもうここにはいない、というと、明日の泊まる所へ山ごえでもっていくから、足賃を出してくれという。半信半疑で、金をわたし、われわれはここで一泊し、つぎの朝、車でいけるところまで上った。美しい棚田がつづく村々がつづいたが、すぐに道はむつかしくなって、ひき返し、再び海岸線にでて西へむかい、つきあたりを北へ向かってマ

ムジュへ泊る。青少年のスポーツ大会のため、ホテルが満室、やっとプンギナパンの二階に一室みつけ、あつい夜をすごす。

翌日は、朝から１で述べた黒檀のある地域へ入り、昼からはラカハンの近くで Tri がかつて研修で教えたクリニックの先生にあって情報をきく。Tri は毎年、林業局の主催でインドネシア全国からあつまった人に沈香の人工的発生のメカニズムを研修で教えている。この研修にあつまった一人がこのクリニックの先生である。

かれは、昼からクリニックをさぼって、山へ同行してくれる。ここから３km 上って３時間歩いた山の上に沈香があるという。私はこの日は朝の黒檀で少々つかれ、また充分満足していたので、この山行きはやめておこうとおもったが、Tri がいくというので、やむをえずついていくことにした。道は村から直登で焼畑へ入り、その尾根から本格的な山登りがはじまる。１ヶ所、ガケのようなところで、先にあがっていた先生が私の手をひこうとしたが、かれは私の重さを過少評価していたのか、二人とももんどりうって数 m 下へころがりおちた。さいわいケガはなかったが、メガネを 5 分間さがし、やっとみつけて、また歩き出したが、こんどはコムラかえりが 1 回、2 回とおこり、左足がつってきた。3 回目がおこり、道もさらに急になって暗くなってきたため、ひょっとして、足が動かなくなって迷惑をかけるといけないと思い、ここから一人で下りることにした。Tri はまだがんばる。帰り道に白い石灰質のフンのようなものをみる。あとからきくとパイソンのフンだという。白い部分は動物の骨のとけたもの。このあたりのパイソンは樹上から人をおそい、丸のみにするので、人はこわがって入らない。ウソのような話だが、数年前に捕獲されたパイソンの腹から服をきたままの大人の遺体がでてきて、それが新聞にのったという。パイソンの口は 180 度以上に開くため、人間の大人でも丸のみにできるという。黒檀をうえる作業は黒檀の更新のために必要なのだが、ここでは誰もこわがって山へ入りたがらないから、飛行機から苗木をばらまきするという。なんとも世間ばなれした話ばかりだが、このあたりの森には一種独特のこわさがただよっている。

下って、夕方になり、マンディをしてかなり時間がたったころ、Tri がもどってくる。彼女も結局は沈香まではたどりつけず、途中から一人でひき返してきた。急坂をソリのようにすべって下りてきたという。疲労困憊の様子である。先生ともう一人の友人が沈香木まで到着し、サンプルをとってきてくれた。色は白いがニオイは悪くない。Tri はていねいに標本をつくる。

その夜はラカハンのロスナンにとまる。夜ポリスがやってきて、アレコレとたずねる。アムリが書いてくれた手紙がきいて、特に問題ないが、2 時間近くしゃべっていく。7 人兄弟全員がポリスで全国にちらばっているという。

翌朝、食事を茶店ですまし、約束した人物がくるまで、村の上の方で情報をえる。このあたりは織物が盛んで、トラジャへもっていってうっている。沈香も多いが、今手許にもっている人は少ない。

昼前、あきらめて出発しようとした時、ママサで約束した男が、沈香をもってやってきた。

何でもはじめにのったバスが途中でエンコし、時間がおくれたらしい。それでも 15km を速足で歩いてきてくれたのである。もってきてくれた沈香は、やはり三流品であったが、がんばってもってきてくれたのだからと全部買取る。香りはわるくない。

この人がきてくれるか、きてくれないかでわれわれの第一印象もずいぶんとかわったであろうと思う。われわれは大へん気をよくして、山を下り、さらに北へ向う。

カロッサをこえて、夕方、いなかの町はずれで、やはり Tri の研修にきた人にあう。しかし、この人は沈香はうえていず、カロッサにいい人がいるという。スムバワ人が長く入って沈香を探しているという。暗くなった道をひきかえし、カロッサの町で沈香をあつかう人を一人さがしあてるが、この人も現物はもっていない。スムバワの人は町はずれにいるときき、町はくらいのでやむなく一泊することにする。沈香さがしは、刑事のききこみのように足を棒にしてききまくるしかない。

翌朝、何人もの人にきいて、やっと町はずれの一軒の家に間借りしているスムバワのワウオというところからきているグループの一人にあう。1990 年からここへきていて、中部スラウェシで沈香をさがしているという。二人いたが今は何もなく、もう一人の今山へ入っているのが、いいのをここの女主人にあずけているが、カギがないのでみられない。上物の黒いスーパーだというが、現物をみないのでなんともいえない。ここではこの情報だけにしてさらに北へ向う。

北への道はオイルパームとトランスミグラシーの貧しげな村である。悪路と暑さとまわりの貧しげなフンイキにつかれ 4 時頃パルにつき、そのまま山ごえでパリギの町へ泊まる。パリギへの山ごえの峠はコーヒーと丁字の畑がつづく。パリギの町で、パルから南へ入る道ぞいに沈香があるときき、翌朝もときた道をひき返す。こういうことは度々あり、これをいやがってはいけないのである。ひきかえしてパルから国立公園へ入る道は、土壌浸食のはげしいところで運ちゃんはいやがったがかまわず突入する。国立公園をこえたあたりで、丁度葬式をしているところで沈香を知る人をみつけ話をきくと、本人は沈香をとったことがなく、かつてはスムバワの人が 500 人くらいやってきたという。今も沈香は山に入ればどこにでもあるという。スムバワの人は定期的にきているらしい。

ここからの帰りに停電し、なくなりかけたガソリンを補給するためよったスタンドのポンプが動かず、停電のない町へいこうとした時に黒檀の店をみつけたのである。

井上さんにあって黒檀の話をきき、ポソの町へ向う。ポソの近くにくるとやけた家のあとが目立ち、ポリスのパトロールが目立つ。今回の旅で一番心配したのはここであるが、何のチェックもなく通過し、ポソ湖のペンドロで泊まる。

まっ暗で誰も人がいず、だまって入っていくとやっと人がでてきた。めしもあり、湖のすぐ間近のコテジもわるくない。ここから翌朝、東のコロンダレへ向う。美しい湾が売物の景勝の地であり、湾をこえたむこうに国立公園があって、背の低い先住民の人がいて、そこへいくエコツアーにのってくる外国人が年間数十人いるという。この港にはパプアから帰ってきた荷のない船がここへ上ってロタンやダマールをつんでいく。倉庫にはかなり上質のロタ

ンとアガテイスからとれるマタクチンとよばれる白い半透明の樹脂が袋づめにしてある。

ここから南へ下りマロナ湖を小さなふつうの船のようなフェリーでわたり、カナダ系のニッケル工場のあるスロアカへでる。まわりの山々は鉱山からのガスで赤茶けた裸で下をモーモーと黒煙をあげつつ大トラックがいききしている。われわれはここを通過し、トウティに泊まる。

このトウティ湖も静かないい湖である。宿のうらがベランダになっていて湖上につきだしている。室いっぱいのベッドの上で沈香のことを考える。明日はこの湖をわたったところにあるトカリンドの村の、室いっぱいの沈香をもっている男にあいにいくことになる。はたして本当かどうか。今から楽しみである。

翌朝、8 時に船にのるが、出発は 9 時、ゆっくりと静かな湖上を走る。1 時間半でつき、すぐオジェで目的の人の家まで 10 分。たしかにある。タイルばりの家の一室一杯にうず高く大中小のさまざまな大きさの沈香が袋に小分けされてつんである。しかしみな二流品である。もう少しいいのはないのときくと、やはりでてきた。スーパーではないが AB という 1 ランク下の、今ではこれがスーパー的にあつかわれ、kg あたり 800 万 Rp という。全部買いとりたいところだが、手持ちがなく、ほんの少しわけてもらう。それでもズシンと懐にひびくくらい沈香は高くなった。

湖へもどる手前で、もう一人男がよびとめ、同じような AB をみせてくれた。これを半分、分けてもらう。帰りの船の屋根には収穫されたばかりの米がつんである。その間にねころんで涼風を楽しみながらもどる。もどったところで、さらにもう一人、今度はこれまで一番いいモノをもっている仲買人にあう。計 3 ヶ所から、AB クラスを 3 サンプル手に入れ、やっと本格的な沈香にでくわし、うれしくなってくる。やはり沈香は黒色に近く、ズッシリと重みがないと気分はよくない。スラウェシへきて、やっといい沈香にめぐりあえて、満足した気持ちで出発し、もう一度昼の光でニッケル鉱山をみ、横転しているバスを横目にしてボネ湾へ向かう。ここからは道は大へんよくなり、きのうまでの悪路がウソのようである。

ボネ湾ぞいにはエビ池と水田が、内陸側はハゲ山がつづく。夕方マサンバで、近くの村の老人の家の庭にうえられた沈香をみる。翌朝、この老人を再び訪ね、家からオジェでオイルパームの中の谷底にある畑に 3 本の直径 5 cm ほどの沈香がココア畑にうええあるのをみる。まわりはすべてオイルパームである。

ここからマイヒの村へ上る。キジヤンが途中でエンコし、オジェにのりかえて入ったこの村は花崗岩の村、清流と花崗岩の丸石が美しい、ここの畑にも直径 8 cm、高さ 6 m の沈香がうえてある。ここも 500 人くらいの人がやってきて沈香をとりにくるという。村長さんの家の近くに人があつまり、沈香をもってきている。ひとつは AB だがほんの少量であり、もうひとつはブアヤといって黒いが香りはしない。それ以外にはない。モノはとれるとすぐに業者がもっていくからあとにのこっているということは少ないのである。この村で沈香をとり出す時につかう小刀をわけてもらう。みな親切で気持ちがよい。これからはもっと木をうえる努力をしたいという村人の決心をきいて村をあとにする。パロポでうまい魚を食し、急坂

を上って一気にタナトラジャに入る。峠でトラジャコーヒーを楽しむ。ランテパオでは布と骨董をみ、沈香をたずねる。布は、マムジュから奥へ入ったカランパンからきている。いい布だが値もいい。翌日は近くの村のトンコナンと墓をみる。以前きた時はもっと雑然としていたものが、今は観光客用に整備されていて、墓もおどろおどろしたところがない。昔のほうが味があったと思うのは年よりの常か。

ここからササ村というところで沈香の植林をみるが、畑のよこに水もやらずにほおってあって、育ちは悪い。もっと手入れをしてくれと Tri はいうが、石灰岩地帯では沈香の植栽はむつかしいかもしれない。基本的に沈香木の好むのはじめじめしていて山の斜面の中部から上部にかけてである。

あとはマカッサルまでとばし、次の目的地スラバヤとプロボリンゴへ向う。

IV. プロボリンゴとスラバヤの沈香

ライオンエアーでスラバヤへ飛び、プロボリンゴへ向う。ふつう 2 時間でいける道が、3 ヶ月前から泥流が突然ふきだし、今も周辺は、閉鎖された道や村が多く、渋滞する。

3 時すぎ、やっと港につく。ここへやってきたのは、2005 年に、パプアにいった時、パプアから沈香をつんだ船はすべてここへ向かうときいていたからである。大型の船はスラバヤへ入り、木造船はここへ集まる。港は中型から小型の木造船でごったがえしている。目的の船は、港のはしの方で最後にみつかった。白い色のペニシであり、10 人ほどの船員がいる。そのうちの一人が、ここで沈香をあつかう、38 才のエンデ出身の男性であった。かれはパプアからの沈香をここで荷揚げし、主に台湾へ送る。大きな倉庫をみせてもらうが、今はそう多くは入っていない。安物のクズ沈香を何人かが手分けして干している。今はシンガポールへ送らず、直接ここから台湾へ送るという。これで交易ルートのひとつが明らかになり、われわれは去年からの懸案の一項が解明でき、大へん気分よく、ブロモ山に登る。この山も数十年にわたって何度も上をとんでいて、いつかはと思っていた山である。丁度明日から年一回のお祭りがおこなわれるというので噴火口のすぐ下に泊まりこんでいる人も多い。満月の明日は 1 万人以上のヒンズー教徒が集まり、火口にニワトリや山羊をささげるという。われわれは火口に花をなげ入れ幸運をいのる。

翌日は、スラバヤの沈香業者の探索である。ここも 20 年来ゆっくりとまわってみたかった町であるが、ナカナカ時間がとれなかった。今日は一日かけてゆっくりと沈香の商人をまわる。といってもとにかくいきあたりばったりに、何人かの家をまわり、次々とイモづる式にあたっていくしかない。アラブ街からはじめ、ここで香水類をしらべ、沈香商人の情報をえる。T 社は、はじめ 3 人兄弟の父がスマトラでトロール漁をやっていたが、禁止になったので 1988 年に沈香にきりかえたという。長男はバンシャルマシンにいて沈香をあつかい、次男、三男がここで商いをする。

高級住宅街の一角にあるこの家には、何人も若い人がいて、別室で沈香の選別をしている。

ここにはパプアの「スーパー」がある。それもとびきり上等のモノで、1 kg あたり 1700 万 Rp である。これまで最高の値である。これが今 20kg あるという。ほんの少しサンプルにわけてもらう。いろいろと話をするうちに、この人がこの東インドネシア一円の沈香協会をとりしきっていることを知る。今 22 社がガハル（沈香）協会に参加し、この次の 21、22 日に今年の CITES（ワシントン条約）の相談をする。現在あるアクイラリア 120 トンという枠をもう少しふやしたいと考えているという。

沈香業者には植林が義務づけられ、今、この郊外に 2ha、1500 本の植林地をもっているが、今後もっとふやしたいと Tri に相談をしている。昼食のあと近くの倉庫に案内してくれる。1200 ㎡の大倉庫に 1／3 くらい各種の沈香がつまっていて、パプアからきた大モノは小さく切断されて、倉庫の前で干される。干したあとは、さらに細かく粉砕されて台湾の線香用に送るという。パプアの低湿地モノは、材の中まで同質だが、山のものは、外側はいいが内部がよくなく、これをよりわける必要があるという。その仕分けが年季のいるところなのである。台湾茶に沈香をうかべた茶をごちそうしてくれる。沈香の香りのただよう大倉庫での茶はいうことなしの一品であった。

V. スムバワの沈香

スラバヤからマタラムへ飛び、郊外の村でスムバワの情報を集める。ここは一村一品運動のようなことをやっており、バリでうられている木の盆の下地をつくっている。またあとでわかったことである BMW（ブラックマジックウッド）といって沈香の白木の部分をけずり、これを沈香液につけて売り出す最近の流行の品の木片もつくっているという。スムバワの情報については、ここから採取に出かけた老人がいて、スムバワの西半分の南岸沿いに多いという。かれはポリスがこわいので、裏道を歩き、とった沈香はボスにすぐにわたして、また山へ 3 ヶ月くらい単位で入っていたという。

翌日、朝 7 時に出発し、東のラブアンへ。すぐフェリーでスムバワへわたり、南海岸へ南下する。Tri が 2 月に来た時は緑一色だったそうであるが、今はカラカラの茶一色の世界である。

南海岸の小さな村トンゴで、マタラムから移住してきたトランスの人の沈香をみせてもらう。中部マタラムに新しい空港をつくるというので立ち退かされ、ここへうつってきた。沈香も高さ 4 m くらいになっている。10 年前にうつってきた時は一面の森であったという。この家から 30 分の山側に 5ha の土地があり、ここに 10cm の沈香があったが、すでに切られてない。この畑にはナンカの木を 5000 本うえるという。もう一本の残った沈香木は幹の半分がそがれている。油用にこうしてもっていくのである。ここでもいかにして沈香が大きくなるまで保存するかが一番大きな問題である。

翌日はもう少し東へいったところから南岸に入るが、最後の急斜面がのぼり切らず、歩きはじめたが、目的の村ははるか先のため、あきらめてもどり、途中で、沈香油をとる装置を

みせてもらう。昨日みたそがれた材などを買いとり、原料を煮て油を抽出する。が近頃はとりしまりがきつくなったので、廃業する人も多いという。つぎの日に訪ねた人は沈香とりをやめて大工をやっている。このあたりは、つかまると刑務所に入れられるので怖くてやめるという。ビマでは第一夫人と第二夫人の間をウロウロしている業者をつかまえようと何度も往復したがつかまらず、あきらめる。

翌日、東海岸のサペへ向かう途中、スラウェシであった人の村ワウオによる。こみあった家の中に、知り合いがいて、この村全員がよく沈香とりに出かけると聞く。

サペから南へテレコムのアンテナのたっている標高 886m の山へのぼり、うら山を少し下った 700m 前後の山地林に、はじめてここの自生の沈香木をみる。10 数本の小木がしっかりと生存している。ここから標高 500m あたりにかけて、天然の沈香がみられる。調査のおわりになって、やっと天然沈香をみることができ一応満足して、スムバワを出る。

最後はシンガポールである。ここには今 15 軒ほどの沈香の卸売業者があり、ここ 20 年くらいのつきあいである。旧空港近くの大倉庫群に入ると、いくつかの倉庫で沈香の整理をしている。私はいつも二階のはしから順番にまわってこの年の状況をきく。

去年にくらべて、今年はみな元気がいい。去年は CITES がらみで転業を考えている人が多かったが、今年は逆に高値になってきたため、好調のようで、みな顔色がよい。強気である。やはりパプアからのものが多いが、一人、イエーメンの業者がブルネイのスーパーをもっている。キロあたり 9000 ドルである。もっといいのは 10,000 ドルというのもあるという。一体誰がかうのかときけば、アラブの王族にとっては何でもない値だという。たしかに石油関係のロイヤルファミリー関係者にとっては、むしろ高値になればなるほど、つかってみたいと思うのかもしれない。高価な絵画や骨董に手を出すのと同じ心情が働いているようである。

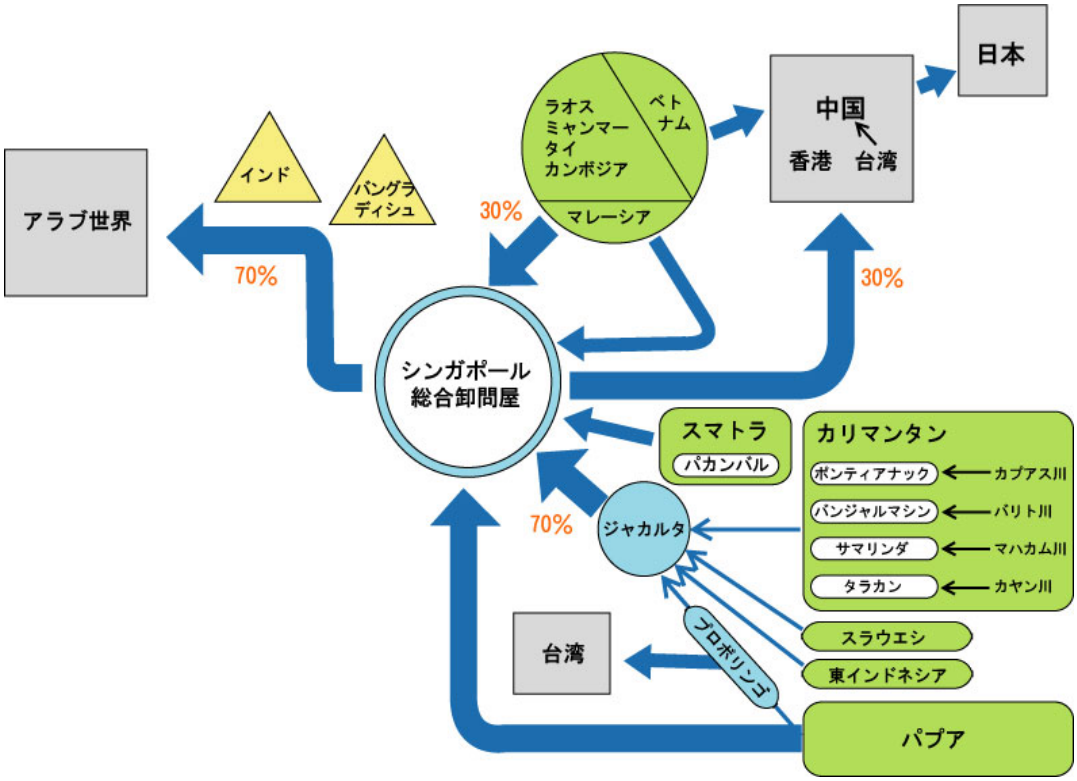
しかし、全部の店をまわっても開いているのは 10 軒くらいで、やはり、沈香だけでなくいろいろな資源を同時にあつかっている店も多い。ここ数年はりきっていたパプアの店もとじたままである。

帰り道アラブ街で、乳香を求めるが、これもオマーン産のものが少なく、エチオピア産とかいう乳香をかう。どこもいいものが少なくなって、まがいものがふえている。GMW も、結構アラブで売れていて、シンガポールの業者もあつかっている。

ここ数年の動きの中で、パプアといえどもはや資源が少なくなってきて、今再び、カリマンタンへもどりつつあるという話もある。何よりもここ最近の大きな動きは、植林がふつうになり、植林木を細工して、人工的に沈香成分を抽出する方法が確立してきたことであろう。沈香の新しい時代がやってきたのである。

文 献

Yamada, I. 1995. Aloeswood forest and maritime world. *Southeast Asian Studies*, 33(3): 181-186.



2006 年度の東南アジアにおける沈香の流れ図

.